

正常と異常のはざま——目次より

- 「境界不鮮明社会」の病理
- 若者時代の延長化
- 青春期のさまざまな病態
- 「青春期境界線症候群」
- 境界線上の性と愛
- 境界線上の生と死
- 「大人」になれない大人たち
- 発病のメカニズムと素因
- 異常から正常への帰還を求めて
- 良好サイン・不良サイン
- 「育てなおし」という治療



●もり・せいじ

一九四七年、岐阜に生まれる。

一九七二年、名古屋市立大学医学部卒業。精神医学・精神衛生学専攻。

名古屋市立大学医学部助手、愛知医科大学講師を経て、

現在、柳城女子短期大学教授。医学博士。

地元名古屋に根を下ろし、実践に役立つわかりやすい精神医学をめざす。

著書に、「アンデルセン童話の深層」—創元社、

共著書に、「青年期境界例」「子どもの社会心理」—金子書房、

『躁うつ病の精神病理』『青年の精神病理』—弘文堂、

『思春期の精神病理と治療』—岩崎学術出版社—など多数。



森省二

講談社現代新書

P550



945

正常と異常のはざま

境界線上の精神病理



945

講談社現代新書

正常と

異常の

はざま

境界線上の
精神病理

森省二

心に重い問題を抱え、精神的な健康と不健康の
境界線をさまよう人びとが増えている。

苦悩を乗りこえ、健全な生活へと帰還する道しるべを提供する。



定価=550円(本体534円)

ISBN4-06-148945-3 C0211 P550E(0)

けの歪んだ繰り返しにすぎない。心は暖か味に包まれることがなく、また、何一つ安心できることのない、果てしなく不毛の世界として展開したのである。

し子は境界例、もう少し厳密に言えば、人格障害に隣接する境界例（グリーンカーらの分類では第二群）と診断してもよいであろう。

この事例をもとにして、境界例全般に見られる性愛の異常をまとめておこう。

境界例は性アイデンティティの獲得ができていない。そのために、異性関係が成立したとしても「愛し・愛される」という相手との相互性を欠き、一見激しく求愛的にみえても、それはひたすら自己満足を求める自己中心的なもので、持続性を欠いている。そして性アイデンティティの不全さを、性愛関係に強迫的に執着することと補おうとする。そのために、同じ失敗を繰り返したり、倒錯した行動に明け暮れ、不毛の世界が果てしなく続くのである。

分裂病と違って、境界例は現実での愛情希求を決してあきらめてはいない。また、妄想的あるいは自閉的な世界でのみ成就しようとするわけでもない。彼らはひたすら現実に執着し、すべての人間関係の根底にある「愛（信頼）」を渴望的に希求するが、「愛」を確かなものとして身に付けるトレーニングとでもいおうか、そういった幼児期の体験を欠いているために失敗するのである。彼らは「愛の蜃気楼」を追い続ける。近づこうとすれば、それはたちどころに消え

てしまい、結局「愛そうとしても、愛しえない」自己懷疑の中に、自らを晒すことになるのである。

こういう彼らのおくなき行動は、赤ちゃんが母親を求め続ける姿に似ている。すなわち、境界例にとって「愛」は母胎回帰への幻影なのである。幻影であるからこそまた、彼らの愛はあらゆる形にデフォルメ（変形）され、異常現象として現われるのである。

4—境界線上の生と死

「クライ・フォー・ヘルプ！」

青春期は、すでに述べたように、自殺およびその類似行為が起りやすい。それは、この時期がまさに、生命活動がもつともさかんであると同時に、突然、それが希薄となり、生と死の境界線をさまよいやすいからである。先の【事例Ⅰ】（境界例）でも、身も心も傾けて相手に突進していくかと思うと、とたんに絶望して、自殺を企てる。では、彼女は本当に死にたかっただかという、実は違う。自殺の心理は、いつの場合も、その背後に強い生への願望が発見できるのである。ここで、十七歳で自殺した少女の詩を紹介しよう。

何のために 生きているのか わからない

もう 誰も信じられない

愛がむなし

死にたい なぜだか 私にはわからない

でも 負けたくない 苦しみに

強く 生きたい

お母さん お母さん

(名古屋タイムズ社編『十七歳の遺書』より引用)

彼女は、いままさに生と死のはざまにいる。誰も信じられない。愛がむなしといいながらも、お母さん、お母さんと母親の愛を求める。死にたいといいながらも、負けたくないという。この両極に広がる矛盾した心理を、十七歳の彼女は統合することができずに、死の方向へと境界線を踏み越えてしまったのである。

この詩から、少女が信じられる何かを、愛しうる何かを求めていたことがわかるだろう。自殺は「クライ・フォー・ヘルプ！」(助けを求める叫び) (カール・メニングガーの言葉) なのである。

生命活動の活発化と希薄化

しかし、自我に目覚めはじめた若者たちは、その心の弱々しさを誰にも悟^{さと}られたくないと思う。悟られることは自分の弱さを暴露することに他ならないからである。その上、ときには生と死の選択も自分に委^{ゆだ}ねられていくと、考えることもある。次の少女の言葉が、そのことをよく物語っている。ちなみに、これは、前の詩を作った少女のクラスメートが、彼女の死をめぐってクラス討論したときの発言である。

「私たち、倫理社会のテーマに、自殺をとりあげたの。結論は「自殺は悪い」ということにはならなかった。人間の特権っていったらいいすぎかな。私だって、受験のあせりでイライラすることだってあるわ。でも、だから死ぬっていうわけじゃないと思う。もっと複雑よ」(名古屋タイムズ社編『十七歳の遺書』より引用)

この討論において、自殺は悪いことではなく、むしろ人間の特権であると考える点に、若者たちの特徴がよく表われている。まさにこれが、青春期の自我意識であろう。同じ年齢でも詩の少女とは大違いである。「だから死ぬっていうわけじゃない……もっと複雑よ」というク

ラスメートの心の健全さ、すなわち、人間のもっともベーシックな部分で「生（エラン・ビタール）」に根差して生きていることに注目しなければならぬであろう。

心病める若者たちに接するとき、しばしば私は、彼らに、なぜ生きなければならぬのかと問いかけられる。しかし、その問いに答えることほどむずかしいことはない。これは哲学の永遠のテーマでもある。神の摂理を引き合いに生命の尊厳を説いても、おそらく彼らには陳腐な説教と映るに違いない。頭でつかちな若者の中には、「神さえ決して万能なわけではない……神は自ら欲しても、自殺することはできないのだから」というプリニウスの言葉を口にして、死を前に冷たくほほ笑む者もいるかもしれない。

しかし、これだけはいえるだろう。「死を考えられるのは、生きているからである」と。いかなる条件下においても、生きているから死があるのであり、自殺は生きているという条件のもとに死に直面することである。そして、若者たちにおいては、その活発さとは裏腹に生命感情が希薄化しているという事実を忘れてはならない。彼らは生命活動の活発化と希薄化が紙一重で接する境界線上を、まさにさまよっているのである。

5 「大人」になれない大人たち

「大人」になることの回避

これまでは青春期の若者たちを中心にすえて、正常と異常のはざまの諸問題をめぐって述べてきた。ところが、こういう境界線上の問題は、決して若者たちに限ったものではない。大人たちにも、稀ならず見られる。その典型は、年齢の上ではすでに十分大人であるはずなのに、なお青春期的な心理を未解決のまま引きずっている、いつまでたっても「大人」になれない大人たちであろう。しかも、こういうタイプの大人が、現代の社会病理を反映して、急速に増えているのである。

子供ができて、親「らしく」なるのを嫌う父親や母親が増えている。ある登校拒否児の母親は、私との面接の中で「子供とは、（親としてではなく）いつも友達のように接してきました」と語ったことがある。子供と揃いのミキハウスのトレーナーを着た、実に若々しい母親であった。しかし、その若々しさの中に、親の役割を拒否している母親の姿を認め、子供に精神的な問題が現われても、それは当然のように思えたのである。もっと極端な例では、最初から「子